蘇生屋

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蘇生屋

【Ｎコード】
Ｎ１６６７ＢＡ

【作者名】
うわの空

【あらすじ】
「私？　――蘇生屋、とでもいっておこうか。……君が殺したあの人間を、生き返らせるのか。それともこのまま殺すのか。選んで」

01

人を殺した。――ひとを、ころした。

ナイフを抜かなければ、助かったんだろうか。

奴の傷口からあふれ出る血を見ながら、僕の手の中にある真っ赤なナイフを見ながら、そんなことを思った。

ピクリとも動かない奴の身体を、つま先で蹴ってみる。けれどやっぱり反応がない。恐る恐る、奴の首に手を当てて、脈拍を確認した。――いや、確認できなかった。

「……死んで、る」

耐えきれなくなった僕は物陰に移動し、激しく嘔吐した。

――どうして。どうして、こんなことになったんだろう。

「大丈夫？」

背後から急に声をかけられて、僕はとび跳ねんばかりに驚いた。口元を拭いながら、ゆっくりと振り返る。――そこには、見知らぬ女性が立っていた。二十五、六歳だろうか。長い黒髪が、風のリズムに合わせて揺れている。

彼女はうっすらと笑みを浮かべ、こちらを見ていた。……まるで、幽霊みたいに。

僕は死体の方に目を向けないよう注意しながら、頷いた。

「……だ、大丈夫、ですから」

「見てたよ、全部」

僕は目を見開く。……見てたって、それは、僕が、

「人を殺したでしょう。ナイフで」

そう言われて、僕はもう一度、胃の中のものを吐きだした。

「よお、森野。またちょっと金貸してくれよ。二万でいいからさあ」

放課後、捕まらないようさっさと帰ろうとしていた僕の前に、小村が立ちはだかった。学年で一番背の低い僕にとって、小村は巨漢だ。一歩後ろへ下がる僕を見て、小村は笑った。

「いいよなあ？」

小村の家は、お金に困っているわけではない。むしろ困窮しているのは、僕の家の方だ。父は身体が弱く、今は入院している。母は毎日、朝から晩まで休みなく働いて、それでも苦しいくらいなのに。

貯金していたお年玉は、すべて小村に吸収された。中学生の小遣いなんて、高が知れている。二万円なんて、用意できない。母の財布からお金を抜くなんて、そんなことは……。

「――もう無理だよ」

「ああ！？」

小村に胸ぐらを掴まれて、一瞬息ができなくなる。「ぐっ」と声を漏らす僕を見て、小村は声をあげて楽しそうに笑った。僕の胸ぐらを力任せに引っ張り、顔を近づけると

「二万だぞ。いつもの場所に持ってこい。夜の九時だ。遅れたら殺すからな」

そう言い放ち、僕の鳩尾（みぞおち）に蹴りを食らわせた。

小村を殺す。そんなことを考えていたのは確かだ。

だからこそ僕は、約束の場所――人気（ひとけ）のない河原――にお金は持っていかず、代わりに果物ナイフを持っていった。

――違う。本当はただ、ナイフで脅すつもりだったんだ。

「これ以上金を要求してくるな」って、そう言えたらよかった。

「なのに小村君が突っ込んできて、揉み合ってるうちに刺しちゃったわけだ」

胃液まで吐きつくした僕を見て、見知らぬ女性は腕を組んだ。口元は笑っていて、けれど楽しそうではなかった。苦しむ子供を見守る保護者のような、目。

僕は女性の姿をもう一度確認する。嫌な言い方になるが、ぱっと

しないグラビアアイドルのような顔だ。丈の長い茶色のコートに、黒のブーツ。……身長は、百六十センチほどだろうか。それでも、チビの僕からすれば大きく見える。

「……あなた、なんなんですか」

四つん這いになっていた僕はのろのろと立ち上がりながら、女性を見上げた。

「私？」

彼女は腕を組んだ体勢のままでしばらく考えた後、

「――蘇生屋（そせいや）、とでもいっておこうか」

「……そ？」

聞きなれない単語に、僕は首をかしげた。彼女は、ここからは見えない小村の死体の方を見ながら、白い息を吐く。それから僕の方に視線を戻し、微笑みかけた。菩薩のようで、けれど背筋が寒くなる、微笑。

ゆっくりと。けれど間違いなく、彼女はこう言った。

「――彼、……小村君だっけ？　生き返らせてあげようか」

「え……」

「生き返らせてあげる。あなたが望むのなら、ね」

「……あなた、お医者さんなんですか」

僕の質問がよほど間抜けだったのだろう。彼女は声を押し殺してくすくすと笑った。

「私が医者？　まさか。彼はもう死んでるわ。普通の医者なら、生き返らせることはできない」

「それじゃ、あなたは……」

「蘇生屋」

先ほど言っていた聞きなれない単語を、彼女はもう一度口にした。

「私はね、死者を甦(よみがえ)らせることができるの。ただ」

「……ただ？」

「恐らく、あなたが思っているような蘇生(もの)とは違う。……甦らせるって、あなたの中ではどういうイメージ？」

訊かれて、僕は黙り込んだ。いきなりそんな非現実な話を、しかもこんな混乱している時に問われても、答えられるはずがない。

そのことに気付いたのか、それとも僕の想像力のなさにあきれたのか、彼女は続きを話し始めた。

「時間を巻き戻したみたいに小村君がすんなり生き返って、いつも通りの平和な日常が戻る。そう考えるかもしれない。――けれど、私の力で小村君を生き返らせても、そうはならない。『あなたが小

村君を刺した』という事実は消えないし、『小村君が死んだ』という事実は『小村君は死にかけた』という事実に変わるだけ。――つまり、小村君を生き返らせたとしても、あなたの罪が消えるわけじゃない。……そうね。小村君を蘇生させたなら、あなたの罪状は殺人未遂かな？　ああ、あと、銃刀法違反？」

それから、と付け加えるように彼女。

「小村君を生き返らせた場合、当然だけど小村君には『あなたに刺された』記憶が残っている。……報復とか復讐とか、あるかもね」

僕の顔から、さあっと血の気が引いた。小村を生き返らせたら、僕が小村に殺されるかもしれない。

僕の反応を見ていた彼女はやがて、挑発的な笑みを浮かべた。

「――もうひとつ、あなたには選択肢がある。『小村君をこのまま蘇生させない』こと」

「……それだと、僕は殺人未遂じゃなくて殺人者だ」

だったら蘇生させたほうが、まだマシじゃ――

「いいえ」

僕の言葉をさらりと否定した彼女は、目を細めた。

「私、物事を隠蔽（いんぺい）したり改竄（かいざん）したりするのも得意なのよ」

「それって、どういう……」

「あなたが『このまま小村君を殺す』、つまり蘇生しない方を選択した場合は、『あなた以外の全ての人』の記憶を操作してあげる。そうね……。小村君は『殺人』ではなく『病死』だったことにしましょうか。そうすれば誰も被害者にはならないし、加害者にもならない。あなたも、世間から殺人者として見られることはない。……『小村君が殺された』という真実を知っているのは、あなただけになるわ」

言葉を失う僕に、彼女は笑いかける。

「――小村君を生き返らせるのか。このまま殺すのか」

菩薩のようで、般若のような、笑顔。

「世間から殺人未遂犯として見られるか。自分の中でだけ、殺人の罪を背負うか」

彼女はその笑顔を、僕に向けた。それは救いなのか、それとも

「選んで」

――罠、なのか。

02

朝、ロールパンを食べていた僕は急いでトイレへと向かった。便器に顔を突っ込み、胃がそのまま出てくるんじゃないかと思うくらい、激しく嘔吐した。

僕が、朝食を摂りながら見ていたニュース。

『男子中学生の刺殺体見つかる　犯人の手掛かりはなし』

「……どうする？　私と契約する？　それとも普通に、殺人罪で捕まっちゃう？」

――昨夜。小村を殺したあの河原で、彼女は殺人者の僕を見て笑った。目撃者の彼女は余裕たっぷり、殺人者の僕は余裕のない表情だ。

このまま何もしなければ小村は死んで、僕は捕まる。

彼女と『契約』した場合、選べる道は二つだ。

小村を生き返らせ、殺人未遂犯として生きるか。

小村の死因を『病死』として終わらせる代わりに、人を殺した罪を自分の中で背負い続けるか。

僕はごくりと唾を飲み込み、彼女の顔を睨んだ。

「――……あなたの話は」

「信じられない？　なら、それでもいいわ。小村君は、このまま見殺しね」

――見殺し。

その単語が引っ掛かって、僕はまた言葉に詰まる。彼女はくつくつと笑うと、小村の遺体がある方へと目を向けた。

「このままだと、小村君、朝方には誰かに発見されちゃうでしょうね。――生き返らせるかどうかは、彼の遺体が燃やされるまでに決めて。燃やされちゃったらもう、私の力じゃ蘇生できないから。……とりあえず、蘇生の件は置いておくとして、私とは『契約する』ということでいいかしら？」

僕が無言で力なく頷くと、彼女は思い出したように言った。

「契約する場合、対価がいるわ」

「たいか？」

「代金みたいなもの。――まあ、その話はおいおい、ね。あなたがどちらの道を選ぶかで、対価も変わるし。……ああ、安心して。中学二年のあなたに、お金を要求したりはしないから。それに、――……人を殺した対価はね、そんなものじゃない」

彼女はそう言うと、冷たく白い月を見上げた。

僕は学校に行く準備を整えると、外に出た。母はすでに出勤していたので、扉に鍵をかける。寒さではなく、恐怖のせいで手が震えて、鍵を鍵穴に差し込むのに酷く時間がかかった。

小村を生き返らせるか。それとも病死にするか。

どうする。どうすれば――。

「学校行くんだ。律儀ね」

いきなり後ろから声をかけられて、僕はぎょっとした。振り返ると、昨夜と同じ姿の彼女がそこにいた。相変わらず、薄い笑みを浮かべて。

昨夜の彼女の言葉を思い出す。

『あなたが捜査線上に浮かばないよう、上手く処理するから安心して。お客様（あなた）が警察に連行されちゃったら、私としても面倒だから』

「顔色悪いよ。学校、休めばいいのに」

彼女の言葉に、僕は首を振る。疑われるとかそんな問題ではなく、学校にはきちんと行っておきたかった。じゃなきゃ、苦しい生活にも関わらず、僕を学校に行かせてくれている母にあわせる顔がない。……いや、小村を殺してしまった段階で、あわせる顔はないんだけれど。

「ニュースで、小村のことやってました」

僕が小声で言うと、彼女は「ああ」と納得したように頷いた。

「安心して。もしもあなたが『見殺し』を選んだ場合、あのニュースのことも事件のことも、皆はきれいさっぱり忘れちゃうから。――あなた以外は、ね」

彼女はそう言いきって、「早くしないと遅刻するよ」と笑った。

教室の空気は、異様に重かった。

小村の死を悼んでいるのか、誰も口を開こうとしない。小村と仲の良かった奴らも、黙りこんでいる。

――昨日、僕が小村を殺したところを、誰か目撃してるんじゃないのか。

僕はおどおどと周りを見渡しながら、自分の机へと向かった。

「待てよ、森野」

声をかけられ、僕はそちらに顔を向ける。顔を向けなくとも、誰が声を出したのかは分かっていた。小村と一番仲の良かった、金田(かねだ)だ。

「――お前じゃねえのか。小村を殺(や)ったの」

怒っている。はっきりとそう思えるくらい、金田の声は震えていた。

「……僕じゃない」

「ふざけんな。お前以外の誰が、小村を殺すってんだ。いじめられてた腹いせに、刺したんだろ？　お前が！！」

「僕じゃ、ない」

どうして『僕じゃない』と言いきれたのか、自分でも分からない。小村を殺したのは、確かに僕のはずなのに。なのに、

「僕が殺したって証拠が、どこにあるの？」

こんなことを平然と言ってしまう自分に、内心で驚いていた。

「てめえ！！」

金田の右拳が、僕の左頬に直撃する。自分の後ろにあった机ごと吹っ飛ばされ、僕は背中から倒れこんだ。女子の小さな悲鳴。けれど、金田を非難する者は誰もいない。

――そうだ。このクラスの中で、小村を殺しそうな人間なんて、いじめられてた僕以外いないもんな。

僕は近くにいた女子の方に目をやる。彼女は、……明らかに怯えていた。

この喧嘩自体にではなく、――僕に、怯えていた。

ああ。僕はこのクラスで、『完璧に黒に近い容疑者』なんだ。

『容疑者』でもこうなんだ。

それが『殺人未遂犯』になったら？
人殺しでなくても、完璧に黒になったなら。

小村を生き返らせ、殺人未遂犯になることを想像し、僕は笑った。

――僕は、どうすればいい。

03

全校集会が開かれ、ホームルームでもその話題は登場し、ニュースでもその事件は取り上げられ、「誰かに殺された可愛そうな小村君」の話は、学校中の誰もが知る話題となった。

けれど誰も、「犯人」のことは、知らない。

校門から青白い顔でフラフラと出てきた僕に、彼女は「おかえり」と声をかけてきた。彼女と話している姿を目撃されるのが嫌で、僕は人気のない場所まで無言で移動する。そんな僕の様子など気にする風でもなく、彼女は平気で話を続ける。

「あら。どうしたの、頬。痛そうじゃない」

金田に殴られた頬。そこに伸ばされる右手を、僕は思いっきり振り払った。一瞬触れた彼女の手がひどく冷たくて、僕は驚く。

「――ずっと、僕のこと待ってたんですか」

「まあね。お客様だし」

「……僕に殺されるかもしれない、とは思わないんですか。僕は殺人者なんですよ？　口封じを考えたって、おかしくないじゃないですか。なのに――」

彼女は一瞬キョトンとしてから、文字通り腹を抱えて笑いはじめた。……僕の言ったことは、そんなにおかしかっただろうか。

「――ああ、ごめん。あなたの話がおかしかったわけじゃないの。

いや、おかしかったけど。そんな生気のない青白い顔で、殺すなんて言われても、……っ」

彼女はそこまで言うと、盛大に吹き出した。自分の言葉に、自分でウケているらしい。僕は笑い転げる彼女を、ただただ見守り続けた。

やがて笑い終えた彼女は、大きなため息をついた。

「君、えーっと、森野君だっけ？　せっかくだし、いいことを教えてあげよう。まず、私は『例の話』を誰かに告げ口するつもりはない。それから」

先ほどまでとは百八十度変わった、表情。言葉にするなら同じ、『笑顔』だ。

けれどそれはまるで、

「私はね、殺されても死なないの。不死身っていえば、分かりやすいかな」

まるで、悪魔のような、笑顔だった。

「――死なないって、それは一体」

「そんなことより、どうするか決めた？　小村君のこと」

彼女に訊かれて、僕は口をつぐんだ。拳を握りしめ、わざと爪を

喰い込ませる。
小村のこと。小村、の。
「……決めてないんだねー。森野君は、分かりやすい」
僕の様子を見て、彼女はうっすらと笑みを浮かべた。僕は彼女から目をそむける。彼女から、いや、――現実から。
そんな僕の心中まで見透かしたかのように、彼女はふっと息を吐いた。
「一応言っておく。小村君の遺体が焼却された時点で、私とあなたの契約は破棄。あなたは多分、警察に捕まるわ。殺人者として、ね」
「――でもっ」
「今、『小村君を殺した犯人』の手掛かりが見つかっていないのは、私が『お客様』のためにあれこれやってるからよ。契約が破棄になれば、そんなことをする必要も義理もない。……あなたの指紋がべったりついたナイフやらなんやら、いろいろ出てくるでしょうね」
彼女の言葉に、僕は愕然とする。
――ナイフ。そういえば僕は、小村を刺したナイフを、どうした？
「あ、あなたが持ってるんですか？　あのナイフ」
「さあ？」
彼女ははぐらかすように肩をすくめると、白い息を吐きだした。
「殺人犯になりたくないのなら、選んでよ。彼を蘇生させるか、『

病死』にするか」

「……」

「――森野君。あなた、本当に分かりやすいね。君みたいなお客様は、久しぶりかも」

「え……？」

見上げると、ほほ笑んでいる彼女と目があった。ぽっとしないグラビアアイドルみたいだと思った、その顔。けれど彼女は、昨夜の僕が思っていた以上に綺麗だった。

――ぽっとしていないのは顔ではなく、彼女の表情に影があるからだ。

彼女は僕に背中を向けると、さっさと歩き始めた。顔を少しだけこちらに向けて、いたずらをする子供のように、こっそりと声を出す。

「じゃあね、森野君。どちらにするか、決めたら教えて」

「あのっ……」

彼女を呼び止めようとして、僕は気付いた。……そういえば。

「――……あなたの名前は？　まだ、聞いてない」

僕に向かってひらひらと片手を振っていた彼女の動きが、ぴたりと止まる。

「――名前、ね。蘇生屋、じゃダメ？」

「……呼びにくいです」

「それもそうか」

彼女は曇り空を見上げると、

「じゃあ、雪でいいわ。雪って呼んで」

そこから降り始めた白いものを見ながら、どうでもよさそうに言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1667ba/

蘇生屋

2012年1月6日11時50分発行